《自著紹介》

叛乱の季節
―ルカーチの再読の含意について

西　角　純　志

1．はじめに

ルカーチというと人は何を想像するであろうか。多くの読者にとって『歴史と階級意識』におけるルカーチをまず想起するに違いない。『歴史と階級意識』、いや、存命中のルカーチを知る人にとっては、恐らく、1956年のハンガリー革命ではないかと思われる。

2001年の9・11「同時多発テロ」の時期にパレスチナ生まれのエドワード・W・サイードの発言が注目されたように、ルカーチの発言も「東西冷戦下」における社会主義陣営の代表的な論客として注目されていた。だが、戦後日本においてルカーチの思想が決定的な役割を果たしたのは、1968年のパリの「五月革命」に始まる《叛乱の季節》であった。その頃は、ルカーチの著作が日本に翻訳され始めた時期でもあり、『歴史と階級意識』や『レーニン論』は、新左翼の活動家たちのバイブルでもあった。1960年代は、全共闘運動、安保闘争といった学生運動、市民・社会運動が高揚した時期でもある。そして、この動向をあたかも象徴しているのが、60年代のラディカリズムの代表的な論客として知られている長崎浩が『情況』誌に68年に発表した「叛乱論」であった。長崎のいう「叛乱」は、単なる全共闘運動の反乱を意味するものではない。大衆の叛乱のみならず、暴動、デモ、蜂起、民族紛争、ひいては、パレスチナにおけるインティファーダーなど様々なカテゴリーを内包している。9・11からアラブ革命への到る動向、あるいは、3・11の東北大震災に始まる「脱原発の動向」も、「自然の氾濫」というカテゴリーで捉えることができる。「大衆の叛乱」とは自然のなかに隠されている、蠢く無定形な「異形のエネルギー」の産出である。それを定式化したのが長崎浩の『叛乱論』に他ならない。

『叛乱論』に始まる長崎の主要著作は、「党―大衆」という前衛的組織論に対して「アジテーター―大衆」という図式を対置させたところに特徴がある。レーニン、あるいはスターリン的な前衛的党組織のモデルに対して、自己と他者とが相互に否定し合う「自己表現」と「自己反省」といった「否定性」という契機を問題提起しているからである。これは、マルクス・レーニン主義（＝スターリン主義）、あるいは「科学的社会主義」とよばれる旧ソ連型社会主義国家体制に対するアンチ・テーゼと理解することができる。長崎は、大衆の自然発生的エネルギーを「党―大衆」の同一化に収斂させていくのではなく、異形の「産出する自然」としてのエネルギーとして捉え返しているのである。長崎浩は、『叛乱論』で次のように述べている。「初期ルカーチの思考こそはマルクス主義思想を政治の行為の現場にまでラディカルに追いつめているのである。……革命的行為にとってマルクス主義は何を意味するのかとルカーチはつよめているわけだ。……アジテーターと大衆の相剋を生きるものとしての叛乱者はまさに近代その

ものへの叛乱を企画するものだ。ただ、これまでの文脈にしたがって、叛乱者をプロレタリアートといいかえてすますわけにはいかない。プロレタリアートを労働者階級とみたて、両者の合致・離反を現状分析的に議論する思考をいまや決定的に断ち切って、プロレタリアートが受苦している相剋をアジテーター＝大衆の関係として顕在化させ、ここに近代への位置を確保しなおすことが必要なのだ」(1)。革命的大衆のうちに噴出する無定形な「異形のエネルギー」に直面する時、顕わになるのは、「群衆の『自然力』のまえに立たされた革命家の本源的な無力ということである。……レーニンや、その後のアジアの革命家たちも、大衆の『自然力』に直面しこれと拮抗せざるをえなかったからこそ、そこにかの結社＝『前衛党』、『プロレタリア国家』といういちじるしい観念の形が宿ることになった。……革命的大衆の『自然力』に直面するというそのことが、この結社の観念をそれ特有の形に規定することになるのである」(2)。

長崎のいうように、ルカーチのいう階級意識とは階級の所有する単なる意識を意味するものではない。端的にいえば、大衆・プロレタリアートの魂から産出される自然発生的大衆運動の「無秩序の嵐」である。この自然力こそが、プロレタリアートの意識、すなわち、階級意識を階級意識たらしめるのである。それは、大衆蜂起がもっている「暴力的な破壊力」である。ローザ・ルクセンブルクでいえば、「大衆ストライキ」であり、マックス・ウェーバーの「宗教社会学」における「行為への実践的起動力」(＝カリスマ・エートス）なのである。そしてこの「自然の氾濫」という観点こそが、1919年ハンガリー革命の総括ともいえる『歴史と階級意識』を「構成的権力論」として今日、再読する意味を可能にするのである。拙著『移動する理論—ルカーチの思想』の全体のねらいは、実は、そこにあるのだ。

2．ルカーチにおける「移動する理論（トラヴェリング・セオリー）」について

拙書の標題「移動する理論」は、エドワード・W・サイードに倣ってつけたものである。ハンガリーの裕福なユダヤ系の家庭に育った演劇青年ルカーチは、何故、マルクス主義に転回＝移動していったのだろうか。多くのマルクス主義者がそうであるように、ルカーチは初めから共産主義者であったわけではない。この問いは、ルカーチの初期三部作、すなわち、ルカーチの処女作『魂と形式』(1911）から『小説の理論』(1920)、そして『歴史と階級意識』(1923）への転回＝移動を検討することによってそれが明らかになる。サイードによれば「移動する理論」とは、思想と理論が《人から人へ、ある場所から別の場所へ、ある時代から別の時代へ、ある情況から別の情況へと移動する》という、理論と思想の振る舞い方を概念化したものである。ある思想家が、政治的文化的社会状況の中で、築きあげた理論が、新たな時と場所へ、非連続的に移植されることでどのような変容を被るかを、個別具体的な例を基に思考することであり、この現象をめぐるメタレヴェルでの理論的探求である。拙著で行ったのは、ルカーチの思想形成過程をサイードによって概念化された「移動する理論」として捉え返すことである。もっとも、サイードは、ルカーチの思想形成過程そのものを「移動する理論」として解釈しているわけではない。拙著では、ルカーチの思想形成過程を連続の非連続として「移動する理論」として位置づけたものである。「移動する理論」とは、ルカーチの初期から後期への転回＝移動のみならず、初期三部作である『魂と形式』から、『小説の理論』へ、そして『歴史と階級意識』への転回＝移動、端的にいえば、《芸術から政治へ》

の転回＝移動も含まれる。それでは、まず、世紀転換期におけるルカーチの初期三部作について簡単に紹介しておくことにしよう。

19世紀末から20世紀初頭の世紀転換においてひとつの形を与えたのがジンメルの「文化の悲劇」という概念であった。ルカーチは、ジンメル、マックス・ウェーバーとも交流をもち、早くからモデルネの意識を認識していた。モダニズムの芸術運動として形容できるモデルネの運動には、アヴァンギャルド芸術があり、ダダイズムからシュールレアリスムへ、未来主義、表現主義などその後様々な展回を辿ることになる。ドイツではベルリンやミュンヘン、フランスではパリ、ハプスブルク帝国下ではウィーンやブダペストを拠点とするものであった。ウィーンのモデルネの影響下で書かれたルカーチの処女作『魂と形式』は、この時期に執筆されたものである。魂とは、「質料因（マテリア）」であり、形式とは、「形相因（フォルマ）」である。芸術作品は、創造者の意図を離れて様々に解釈できる。作品の創造者と受容者の間に生じる「誤解」が芸術作品の解釈を可能にするのである。「芸術作品はたしかに存在する。それは如何にして可能か」、マックス・ウェーバーをも触発してやまなかった『魂と形式』は、『小説の理論』では、生と形式の分裂に陥る。問題的個人の生と客観的世界との分裂である。小説の主人公は、自己が何者かを探究する冒険の物語であり、犯罪や狂気によってしか自己の内面を客観化できないのである。『小説の理論』における近代の分裂性は、プロレタリアートの意識の発見によって克服されることになる。それが『歴史と階級意識』であった。ルカーチは、近代における主客の分裂性をジンメルやウェーバー、さらにはマルクスに倣って「物象化の現象」として捉えた上で、プロレタリアートの階級意識に着目する。『魂と形式』では、魂によって様々な諸形式が産出されるというものであったが、『小説の理論』では、魂は、先験的故郷を喪失し、流浪の旅に出る。『歴史と階級意識』では、魂がプロレタリアートへと帰郷し、階級意識となる。プロレタリアートの魂とは「叫び」であり、これが長崎のいう大衆＝自然の叛乱の意味するところだと考える。

3．ルカーチにおける「悲劇的世界観」について

ルカーチの初期の作品を貫く主題は、『魂と形式』に内在する「悲劇的世界観」である。「悲劇的世界観とは、人間生活の唯一の意義としての絶対的探求を認めつつ、同時にそれが絶対に実現しないことを知る限界意識」[(3)]である。今回、ルカーチの初期三部作の考察を通して明らかになったことは、ルカーチの初期エッセイ集『魂と形式』における「驚嘆」、「奇蹟」、すなわち「運命」との遭遇といった文学・芸術的な「悲劇的世界観」が、『歴史と階級意識』においては「恐慌」、「革命」といった現実の資本主義社会の「限界意識」として捉えられているということである。それは、カール・シュミットの概念を用いれば「例外状態」である。「例外状態」とは、既存の法的な秩序に対して一時的に法の停止と無効化を唱えるような法外的な状態である。言い換えれば、法秩序の閾、限界である。「悲劇的瞬間」には、人間の存在や行為の意味は停止され、自己の生の純粋体験に立ち返る。シュミットの「例外状態論」は、『魂と形式』における「悲劇の形而上学」のみならず、『歴史と階級意識』の「合法性と非合法性」とも反響し合っている。「悲劇的世界観」における死を前にした「限界意識」において、ルカーチが後に正面から問題にした「全体性のカテゴリー」を導き出せる。ルカーチのボルシェヴィズムへの傾倒は、まさに「革命の悲劇」なのである。

「悲劇的世界観」における資本主義の限界意識、それは、「生きた労働」と「死せる労働」を対置させたマルクスの『経済学批判要綱』の問題射程に繋がってくる。この問題は、後にアントニオ・ネグリによって「構成的権力論」として特徴づけられることになる。「生きた労働は、構成的権力を具現するものであり、構成的権力がそれを通してみずからを表現することができる一般的な社会的諸条件を提供する」(4)。「生きた労働」が「構成的権力」であるとすれば、「死せる労働」は、「構成された権力」である。構成的権力は、生きた労働と不可分のものとして、その生産性をさらにはその創造性の解釈として存立する。生きた労働の核心は、政治的であると同時に経済的でもあり、市民的、社会的、政治的な構造を生産するというのである。

『歴史と階級意識』は、従来「物象化論」として読まれてきたが、「階級意識論」を内在的に含んでいることに留意しなければならない。それは、プロレタリアートの「階級意識」が『魂と形式』に直結しているからである。「魂」とは非対象的力動性であり、「形式」とは対象性である。魂は形式化することにより意味が開示される。プロレタリアートの「魂」とは、まさに「階級意識」であり、階級意識の意識化（＝魂の覚醒）によって客観的可能性が生じる。プロレタリアート自身が、虚偽意識に囚われた存在であることを「知る」こと、それが階級意識の覚醒を可能にする。プロレタリアートの「無意識」の領域からの魂の叫び、それは、大衆叛乱のおける集団的無意識の氾濫であり、抑圧された自然が、欲情として噴出した瞬間である。こうした「自然の氾濫」は、スピノザを経由するアントニオ・ネグリの「構成的権力」概念に通じるものである。1919年の「ハンガリー・評議会共和国」は、プロレタリアートの魂の表出形式であり、ルカーチが、「理念型」として想定したものであった。タナーチ共和国の崩壊後にルカーチ自身が起草した、いわゆる「ブルム・テーゼ」も、ルカーチ自身による「憲法制定権力論」であった。『歴史と階級意識』は、従来のような疎外—物象化の範疇におくのではなく、「構成的権力論」として読み直さなければならない。

[引用文献]

(1) 長崎浩『叛乱論』彩流社、1991年、37－40頁。

(2) ——『革命の問いとマルクス主義—階級、自然、国家そしてコミューン』エスエル出版会、1984年、188－9頁。その他、長崎浩の著作は、以下の文献を参照した。『政治の現象学あるいはアジテーターの遍歴史』田畑書店、1997年。『七〇年代を過る・長崎浩対談集』エスエル出版会、1988年。同じく『共同体の救済と病理』作品社、2011年。

(3) 西角純志『移動する理論—ルカーチの思想』御茶の水書房、2011年、83頁。尚、拙著の詳細な紹介は、別稿『アリーナ』第12号、2011年、参照。

(4) A. Negri, *Le pouvoir constituant : essai sur les alternatives de la modernite,* traduit de l'italien par Etienne Balibar et Francois Matheron, Presses Universitaires de France, Paris, 1997, p.49.（杉村昌昭・斎藤悦則訳『構成的権力—近代のオルタナティブ』松籟社、1999年、67頁）

（にしかど　じゅんじ　専修大学経済学部兼任講師／本大学院人文学研究科社会学専攻修了生）